

令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業 『美術研究』(調査・研究成果の公開) (5)シ07)



『日本美術年鑑』

日本美術年鑑は、我が国の各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録した刊行物である。文化財情報資料部では当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936(昭和11)年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。令和元年版は、B5版、533ページとなった。出版に際し、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

『美術研究』

1932(昭和7)年1月、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第1号を刊行。以来90年近く日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関する西洋美術についての論説、研究ノート、書評、展覧会評、研究資料・図版解説等を掲載している。本年度は434号、435号、436号を刊行した。出版に際して、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。



無形文化遺産部出版関係事業 (ム04)

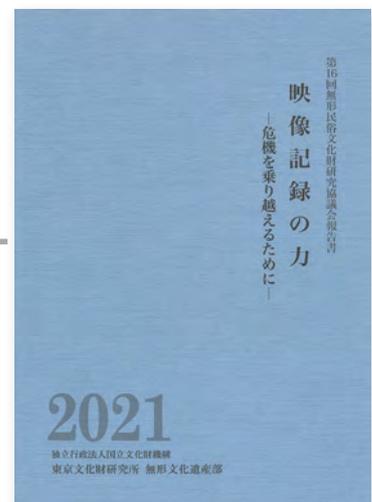


『無形文化遺産研究報告』第16号

無形文化財や無形民俗文化財、文化財保存技術、無形文化遺産保護の国際的な動向等に関する研究論文、調査報告、資料紹介等を掲載している。第16号には報文7件、資料紹介1件の計8件を掲載。2022年3月刊行、182ページ。

第16回無形民俗文化財研究協議会報告書 『映像記録の力 —危機を乗り越えるために—』

無形文化遺産部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して無形の民俗文化財の保護と継承について研究協議する会を開催している。第16回にあたる令和3年度は「映像記録の力—危機を乗り越えるために—」と題して開催し、報告・総合討議の内容などを報告書にまとめた。2022年3月刊行、93ページ。



『保存科学』第61号の出版 (ホ07)



『保存科学』は文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究報告などを報文・報告・資料のカテゴリーで掲載した学術誌であり、1964(昭和39)年に第1号を創刊している。令和3年度は、建石徹編集委員長、友田正彦委員、間淵創委員(文化財活用センター)、貴田啓子委員(東京藝術大学)の4名からなる編集委員会を編成し、投稿された論文に対して査読を行い、報文1報、報告5報、資料3報の計9報の掲載を決定した第61号を刊行した。2022年3月刊行、115ページ。

広報委員会

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』はそれぞれ、各部・センターからの部会員で構成される東京文化財研究所広報委員会の概要部会、ニュース部会が作成し、編集事務はいずれも研究支援推進部企画渉外係が担当している。



『東京文化財研究所概要』は研究所の組織や活動内容を、写真を多用して日英2ヶ国語により簡潔に紹介している。令和3年度の概要はA4判38ページ。

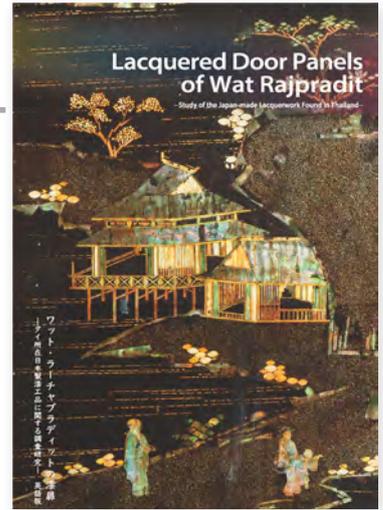
『TOBUNKENNEWS』はウェブサイト公開した毎月の「活動報告」から、紙媒体に適した記事を精選し、文化財保存に関するコラム、刊行物紹介等とともに掲載している。A4判。令和3年度はNo.74(7月刊、60ページ)、No.75(10月刊、30ページ)、No.76(12月刊、26ページ)、No.77(3月刊、38ページ)を刊行した。



Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit —Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand—

本書は、2021（令和3）年3月に刊行した報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究—ワット・ラーチャプラディットの漆扉』の英語版である。タイ・バンコク所在の同寺に関するこれまでの調査研究成果を報告するもので、標記報告書の英訳に加え、タイ文化省芸術局及びワット・ラーチャプラディットによる報文を新たに掲載した。2022年3月刊行、166ページ。

(①シ02の一環として刊行)



『ものの記憶—読み解き・伝え・遺す—』

文化財や美術作品の記録に広く用いられる写真について、撮影が手軽になった反面、最大限の情報の取得や、対象を観察し記憶することへの注意が希薄化した面もある。このような危機感から本報告書では、被写体の「記憶」に結びつく写真のあり方や、過去の写真からの情報取得について、油画、版画、水墨画などさまざまな作品の写真を通じて検討した。2021年6月刊行、135ページ。

(④シ05の一環として刊行)

『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験記絵 巻十一・巻十二 光学調査報告書』

東京文化財研究所が宮内庁三の丸尚蔵館と共同で実施する、鎌倉時代を代表する絵巻物「春日権現験記絵」全20巻の光学調査のうち、巻十一・巻十二に関する報告書である。さまざまな光源での撮影や蛍光X線分析による材料や技法に関する調査結果のほか、作品解説、輿車表現に関する論考を掲載した。2022年3月刊行、114ページ+口絵141ページ。

(④シ05の一環として刊行)





『フォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルス - Good Practiceとは何か」報告書』

2021（令和3）年12月3日に東京文化財研究所で行われた【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム「伝統芸能と新型コロナウイルス - Good Practiceとは何か」をもとに、一部追補し、報告書として刊行。2022年3月刊行、125ページ。

（①ム01の一環として刊行）

『第14回 東京文化財研究所 無形文化遺産部 公開学術講座「竹材と日本の伝統的な管楽器」報告書』

第14回公開学術講座は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、2021（令和3）年3月20日、東京文化財研究所にて無観客で開催し、その記録映像を編集して期間限定で東文研ウェブサイトにて公開したが、その内容をさらに追補の上、報告書として刊行。2022年3月刊行、88ページ。

（①ム01の一環として刊行）



パンフレット『日本の芸能を支える技』VIII 能装束 佐々木能衣装

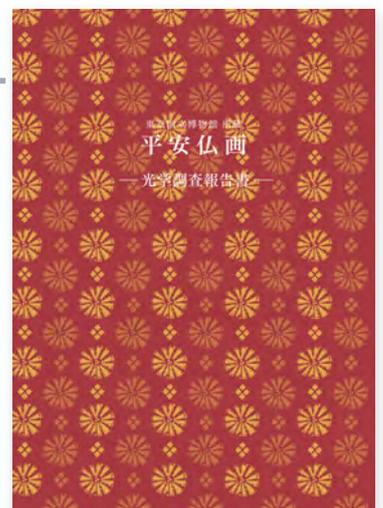
2017（平成29）年より継続的に行っている、芸能を支える文化財保存技術の調査と並行して、その製作者と技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2022年3月刊行、12ページ。

（①ム01の一環として刊行）

『東京国立博物館所蔵 平安仏画 光学調査報告書』

東京国立博物館が所蔵する重要文化財「准胝観音像」及び「准胝仏母像」に関する光学調査報告書。本報告書では、カラー・近赤外線・蛍光写真及び蛍光エックス線分析による調査結果を収録した。2021年9月刊行、160ページ。

（②ホ03の一環として刊行）



Conservation and Restoration of Concrete Structures



Independent Administrative Institution
National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

『Conservation and Restoration of Concrete Structures』

本書は、近代文化遺産研究室が令和2年度に刊行した「コンクリート造建造物の保存と修復」の英訳版である。国内外のコンクリート造建造物の保存と修復に関して、各分野の専門家の論考や、国内外の修復事例をまとめたものを広く海外の専門家にも紹介し、日本の近代文化遺産への取り組みを広めるために刊行した。2021年8月刊行、144ページ。

(②ホ06の一環として刊行)

『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第2部)』

本冊子は、2021(令和3)年8月～9月(セッション1)、2022(令和4)年1月～2月(セッション2)にオンライン配信のかたちで開催された「世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第2部)」の講演内容を書き起こしたものである。その他、今年度の世界遺産委員会の報告、整備に関連する憲章の和訳を掲載している。日本語、2022年3月刊行、104ページ。

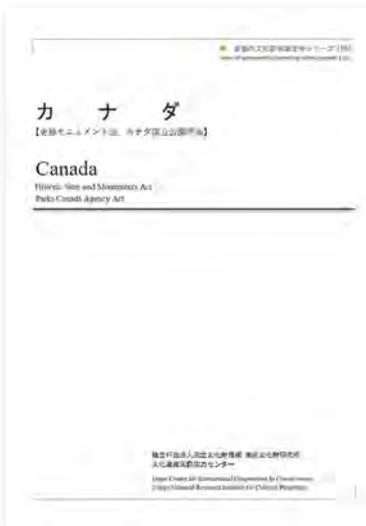
(③コ01の一環として刊行)



『各国の文化財保護法令シリーズ [26] カナダ』

カナダの文化財保護に関する法令について、その中核をなす法律2種(史跡モニュメント法及びカナダ国立公園局法)を和訳し、さらにカナダ政府の元担当者に依頼してカナダの文化財保護制度の概説を付して刊行した。日本語及び英語、2022年3月刊行、117ページ。

(③コ01の一環として刊行)



『世界遺産 ミャンマー・バガン遺跡 華麗なる壁画の世界』

2016年から続くミャンマーの世界遺産バガン遺跡での活動の一部をまとめたもの。図像学的調査を通じて得られた成果の中から58件の寺院壁画について解説するとともに、同国宗教文化省考古国立博物館局バガン支局の職員を対象に実施している壁画の保存修復の様子を伝える。日本語、2021年11月刊行、197ページ、市販品(雄山閣)。

(③コ03の一環として刊行)

